

〈実践報告〉

# コロナ禍における「アクティブラーニング」の推進

## ——創造的パフォーマンス実践報告——

福 崎 紀 章\*

### Promotion of “Active Learning” in the Corona Disaster

### ——Creative Performance Practice Report——

Noriaki FUKUZAKI

**Key words** : コロナ禍 Corona Disaster, アクティブラーニング Active Learning, 創造的 Creative, アート Art, 書道パフォーマンス Calligraphy Performance

#### I は じ め に

2022年コロナ感染第7ピークにある現在、教師・学生のみならず、全国民がマスクをし、social distanceを守り窮屈な生活に置かれている状況の中で、あれほど言われていたactive learningは全く影を潜めてしまっている。

そんな状況の中で、マスクをしてsocial distanceをとってパフォーマンスが取れるものはないかと思案している中、「書道パフォーマンス」を思い出し、これをうまく生かせば「学生たちは達成感を感じ、学生生活も生き生きとした楽しく充実したものになるのではないか」という仮説を立て、実証研究することにした。

#### II 研究の目的

書道パフォーマンスを発展させ、考えられるすべてのものを使って新たな何かを造る「創造的パフォーマンス」を研究することにした。この創造的パフォーマンスの学生たちに与える連帯感とエネルギーは、きっと何かに役立ち、自信を持って取り組むことができると考えたからである。したがって社会人となりお互いに連帯感を持ちながら、率先して動く人間になることを目的として設定した。

#### III 仮説の提示

縦2m×横7mの紙。ぶつつけ本番で、自分の好きな言葉を、個性を出して書を書く。筆で書く事に抵抗があるものは、絵やデザインで書く。絵筆で絵を書いたり、

ボディペインティングとして手形を写したりする。これらの活動を通して、保育士を目指す者同士が、連携を取り、すべてが完成した時、満足感と連帯感を感じる筈である。この活動を支えてくれたのは、高等学校の書道部の経験のある学生が各クラスに1名ずついたことだ。クラス1人の経験者がいることで盛り上がるきっかけとなる。

#### IV 先行研究

「書道パフォーマンス甲子園」より多くの実践がなされている。

#### V 創造的パフォーマンス

##### 1 書道と絵（デザイン）と音楽のコラボレーション・発想の原点

東日本大震災の後、2013年5月1日、EXILE ATSUSHI & 辻井伸行の「それでも生きていく」を見た。辻井伸行さんが「それでも生きていく」をピアノで弾き、EXILE ATSUSHIが歌う。そしてその場を支えるいろんな人（子どもから大人まで）が絵を描いたり、流木に花を挿したり、ペンキや絵具で色を付けたり、ライトを消すと灯籠のように、大きなろうそくに明かりが灯る。幻想的にも見えるこの1つの世界が、見事に創造されていくシーンを目の当たりにして、このような感動を学生たちに与えることはできるようになるのではないかという仮説を立て、HBG版「創造的パフォーマンス」（書道パフォーマンス）を実施することにした。

\* 広島文化学園短期大学保育学科（非常勤講師）

## 2 学生の参加意欲

1学年前期の授業の後半、突然の変更に戸惑う学生、十分な時間もなく、ぶっつけ本番で臨ませるこちらの思いと学生との認識に違いがあったが、保育士として様々な出来事に触れ合い対応していくことの重要性については多くが同意していた。しかし、中には「中学校以来筆を持ったことがない」とか、「なぜこんなことをしなければいけないのか」という疑問の声も耳にした。そのとき「上手や下手ということではなく、今の自分の個性が表れるものを書こう」と呼びかけた。

ここまでは、想定範囲内であったが、驚いたのは、実際にやり始めてからの学生たちの反応である。「意外と面白い」「やりがいがある」「楽しかった!」である。それが周りの学生たちに広がり、「またやりたい!」という声も聞こえた。2年生からも、「書道パフォーマンス」があるのなら、「2年の先生の授業を受けたい!」などという嬉しい言葉が、ロビーで聞こえてきた。教師として、こんなに冥利に尽きることはない。数値化されたアンケート結果よりも、一人一人の言葉が胸に響くのである。この活動を支えてくれるのは中・高等学校の書道部の経験のある学生がいることだった。クラス1人の経験者がいることで、盛り上がるきっかけとなったからである。

## Ⅵ シラバスとの関係の明確化

今回は、「絵本の読み聞かせ」のあと、実験的に「創造的パフォーマンス」と称して取り入れて行っただが、次回からは次のように計画している。

### 1 創造的パフォーマンスの計画

「あかね祭」(11/2, 11/3)に向けて、中心となる文字と背景の文字を決める。

「書道パフォーマンス甲子園」などを参考にし、オリジナルな言葉を考える。

### 2 準備物をすべて書き出し、書く時の(デザイン・絵と書の配置)を考える。

掲示に合わせた、紙の大きさと、紙の裏張りをする。

### 3 それぞれの担当個所を決める。

- ①中心文字 ②背景文字 ③デザイン(絵)
- ④落款(印) ⑤BGMの曲
- ⑥書いた後の処理(軽く墨や絵具の上に置く)
- ⑦立てる時の棒と紐
- ⑧ナレーション(解説)マイク ⑨筆や朱墨
- ⑩カラー絵具類 ⑪ハケ ⑫汚れ防止のシート

### 4 練習・リハーサル

1回目は時間もなく、ぶっつけ本番で書かせたが、やはり多少の練習時間があつた方がよい。試し書きは、字の大きさ、位置、バランスなど考えさせる。書道部だけ数人の活動であるなら、さっとできるであろうが、30~35人の活動になれば、いくら用紙が

大きくても5~6人を区切りながら、5回以上繰り返し返さなければならない。練習全くなしのぶっつけ本番で、1回も書くことなく、よくできたものだといふながら感心する。この辺り何でも順応する学生たちは素晴らしいと感じるものがあった。中には不満を漏らすものがいたかもしれないが、やった後の充実感は間違いなくあつたと思われる。

マスクをし、お互い触れ合うこともなく、静かに書いていく姿は、コロナ禍におけるアクティブラーニングと言えるのではないだろうか。

## 5 次の目標

授業で扱ったこのパフォーマンスは、次の学年に引き継がれ、いずれはHBG大学のパフォーマンスとして定着させたいと考える。

秋には「あかね祭」があり、全学科自由参加できる形で、HBG学園パフォーマンスの良さを体を通して感じ取らせたいと考える。

ミュージックも、様々なジャンルがあり、選択できる余裕もあればよいと考える。そのためには、書だけでなく、デザインや絵、ミュージック、さらにはダンス等とコラボし、それぞれがリーダーシップを発揮して、まとまったパフォーマンスができることである。

これを理想として終わるのではなく、実現させるためには何をすべきかを考えるとき、「サークル」の創設が重要となると考えた。そこにはそれぞれのリーダーが、それぞれの立場で力を発揮して1つにまとめ上げるエネルギーが生まれる。これこそ最高の「創造的パフォーマンス」になるのではないかと考えている。

## Ⅶ 先行研究

書道のパフォーマンスと言えば「書道パフォーマンス甲子園」が、まず浮かぶ。

学校の紹介の動画を見ると、書はもちろんのこと、相当練習を積み重ねている。

練習時間もさることながら、体の動き(振り)、「はい」という声、ミュージックとのタイミング、筆さばき、1秒1秒に無駄がない。言葉も一貫性があり、メインの文字とバランスが取れている。中にはこれは本人たちが考えたものなのかという疑問もあるが、1回転して終了時に立てたとき、だれもが感動する。限られた時間で、限られた演出をし、青春のすべてをこれにかけている姿は、だれが見ても美しい。各高等学校の紹介(全国大会出場校)より学びとれるものは様々であるが、次のようなものが挙げられる。

### ① 書とデザインが共存している。(墨汁の黒色とカラー色)

あくまで、デザインは「書」を浮き立たせるもの

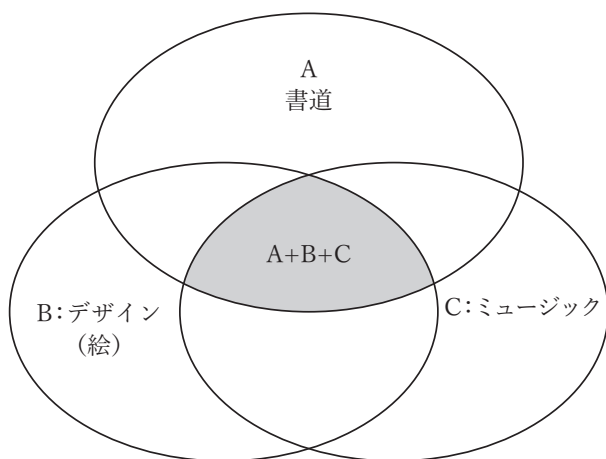
として書かれているが、中にはデザインが目立って、書の印象が薄れるものもある。

- ② ミュージックが流れ、それに合わせて「はい！」という声を出したり、体の振りを付けたりしている。これは、書道パフォーマンスをするにあたって、各リズムを作り体全身を使って書いていくという盛り上げには、効果的なものになっている。
- ③ ミュージックの選曲は、大体中心の文字に合わせてされている。

「書道パフォーマンス甲子園」は、簡単なものではなく、「所作の美」、「演技構成」、「身体表現」、「総合」など、詳しい基準が出されている。書道部門の、「書の美」、「紙面構成」、「用筆の正確さ」、「総合」の上にあるパフォーマンスである。

## VIII 課 題

真の研究はこれからである。書や絵（デザイン）ミュージックの作用が、人間にどのような影響を及ぼしていくのか、書道、絵画、心理学、音楽の側面からの分析が可能な限りされていくことである。



A: 書道  
B: デザイン (絵)  
C: ミュージック

※ ABC の3つが重なったところの研究

〈資料1〉「書道パフォーマンス甲子園」大会基準

大会の審査基準を見ると、高い得点を出すために、次のような審査基準がある。

第15回 書道パフォーマンス甲子園 予選審査基準（全国高等学校書道パフォーマンス選手権大会）

※審査項目等 各審査員は下記の審査項目、審査内容、配点による採点を行い、順位点を導くものとする。

- (1) **書道部門** は、「書の美」、「紙面構成」、「用筆の正確さ」、「総合」の4つの審査項目について採点し、審査内容及び配点は下記のとおりとする。

- (2) **パフォーマンス部門** の審査項目は、「所作の美」、「演技構成」、「身体表現」、「総合」の4つの審査項目について採点し、審査内容及び配点は下記のとおりとする。

【審査項目等】 部門 審査項目 配点 審査内容 書道書の美 30点  
書の美しさ、文字表現の美しさ、色彩の美しさ、選択した言葉の評価 紙面構成 30点  
行の流れや紙面全体のバランス、一体感の評価 用筆の正確さ 30点  
用筆の正確さ、運筆の巧みさの評価 総合 10点  
書とパフォーマンスの融合などを総合し、その書・演技により観る人の心を動かした評価 パフォーマンス所作の美 30点  
書く姿の美しさの評価 演技構成 30点  
演技のストーリー性や組み立て、また独創性のほか、チーム全体の一体感の評価 身体表現 30点  
表情も含め、パフォーマンス、身体での表現度の評価 総合 10点  
書とパフォーマンスの融合などを総合し、その書・演技により観る人の心を動かした評価

## 5. 本戦出場校選出方法

- (1) 本戦出場校数は20校程度とし、各地方ブロックにおける本戦出場校数は、全体の応募校数に対する各地方ブロックの応募校数の割合により決定する。なお、応募があった地方ブロックからは、必ず1校は選出する。
- (2) 各地方ブロックにおける本戦出場校数は次の計算式により決定する。（小数点以下切捨）
- (3) 上記（2）で算出した本戦出場校の合計が20校程度に満たない場合は、各地方ブロック内における選出校数の割合が低い地方ブロックから順に充当する。なお、ブロック内選出校の割合が同じ地方ブロックがあった時は、応募校数の多い地方ブロックから順に充当する。

## 6. 罰則事項

予選実施要領に定めるもののほか、罰則事項については下記のとおりとする。①動画の演技時間が6分を超える場合は、10秒毎に順位点に4点加算する。②下記の場合は審査対象から除外する（予選実施要領に規定）。・演技参加人数が12名を超えている場合・完成写真と動画作品が異なる場合・演技中の動画を編集した場合・揮毫用紙の大きさが概ね縦4m×横6mよりも明らかに大きなものを使用した場合・揮毫用紙に白色以外の用紙を使用した場合・揮毫用紙に落款以外の用紙の貼り付けを行った場合・演技開始前に揮毫用紙への下書き、折目等の加工を行った場合・カラスプレーを使用した場合・照明

による演出を行った場合③その他、提出物に不備や虚偽、または違反があると認められる場合は、主催者で加点または審査対象から除外する。

#### 7. その他

- (1) 審査結果は審査員名を非公開とし、応募校に対して地方ブロック順位の一覧、自校の順位点・総得点・得点内訳・審査員講評を送付する。なお、ホームページ等においては、各校の順位点と順位を公開し、学校名については本戦出場校のみの公開とする。
- (2) 本基準に記載されていない事項は実行委員会で決定する。

#### 〈資料2〉HBG ホームページトピックより

授業 **pickup** 「幼児と言葉」～読み聞かせ・書道パフォーマンス

2022-07-01 保育

「幼児と言葉」（1年前期／福崎紀章非常勤講師担当）の授業では、「みんなで育ちあう楽しい保育」や「保育仲間をつくってもっと変わることを認識する」の目的のもと、様々な体験学習を行っています。

6月24日の授業では、地域の親子の交流の場「ぶんぶ

ん広場」において、乳幼児に向けて参加型の絵本の読み聞かせを、7月1日の授業では「創造的パフォーマンス」と題し、「ことば・絵・音楽」のコラボレーションをめざして書道の共同創作を行いました。学生たちは、絵本の読み聞かせや書道パフォーマンスを通して、表現の楽しさやチームワークの大切さを感じることができ、授業へのモチベーションも上がった様子です。

#### 要 約

コロナ禍におけるアクティブラーニングの1つとして、「創造的パフォーマンス」を実践した。創造的パフォーマンスとは「書道」（前衛を含む）デザイン（絵）ミュージックがコラボレーションしたものである。先行研究としては、「書道パフォーマンス甲子園」などが参考になった。今回はその実践報告であるが、今回はこの後に実施したものも入れて、パフォーマンスと言えるものを深く考察しかつ追究し、その魅力に迫っていきたいと考えている。この内容は、次号で明らかにしていきたいと考えている。

#### 参考（引用）資料

- 1) 書道パフォーマンス甲子園（大会基準）
- 2) HBG ホームページトピック

#### Summary

We practiced “creative performance” as one of the active learning methods during the COVID-19 crisis. Creative performance is a collaboration of “calligraphy” (including avant-garde) design (picture) music. As for his previous research, “Calligraphy Performance Koshien” was a reference. This time it is a report on the practice, but in the next time, I would like to include what I did after this, deeply consider and pursue what can be called performance, and approach its appeal. We plan to clarify this matter in the next issue.



完成：集合写真



